

ヒガンバナのイメージ（9月の自然庭園では） ～みぬま このページを印刷する ス～

このページでは[みぬま見聞館\(大宮南部浄化センター\)](#)のトピックスを紹介をします。

ヒガンバナのイメージ（9月に自然庭園で観察できる動植物について）

いつになく酷暑となったこの夏、動植物たちもこの過酷な環境を生き抜いてきたのではないのでしょうか。一日も早く涼しくなってゆくのを祈るばかりですが、今月は秋の彼岸の頃に咲く「彼岸花」についてお話をさせていただきます。

ヒガンバナは、ヒガンバナ科、ヒガンバナ属の多年草で、原産国は中国、日本では帰化植物に分類され全国に分布しています。

ヒガンバナの花期は、ちょうど秋の彼岸の頃で、花茎の先に強く反り返った鮮やかな赤い花を咲かせます。本来植物は葉が出たあとに花を咲かせますが、ヒガンバナはその逆で、花が咲き誇ったあと、葉が伸びるといった独特な花の咲かせ方、特徴を持っています。その草丈は30～60センチメートル程になり、また花も白やオレンジのものもあるようですが、いずれもあまり印象にないのではないかと思います。

ヒガンバナは別名「曼珠沙華(マンジュシャゲ)」といい、「しびとばな」、「じごくばな」と呼ばれていた地方もあるようで、花の咲く時期や花の鮮烈な色が影響しているせいか、縁起の悪い花という印象がありません。実はヒガンバナは有毒植物で、その全体に毒があり、特に球根には毒性物質が多く含まれています。花や茎、葉そして根に至るまで全体に毒があることが、怖がられてきた理由なのかもしれません。

一方で、ヒガンバナは、食糧事情の悪い時代には食用にもされましたし、塗薬として利用されたこともあったようです。食用の場合、球根を潰して煮て、さらしに入れて絞って、しぼり汁を何度も水にさらすなどして、丹念な毒抜きをして、得られたデンプンを利用し餅や団子にしたり、雑穀と混ぜたりして食べたようです。

ヒガンバナに含まれる毒性物質は、ヒトの致死量には程遠いのですが、ネズミやモグラでは1つの球根で相当数が死んでしまうほどです。そのため、土葬の時代のお墓の周りに害獣よけのために植えられたり、水田の周りの畦道にも害獣から作物を守るために植えられてきました。ヒガンバナは、悪いイメージだけでなく、実際に役立ってきた一面もあることがわかります。

そのように植えられてきたヒガンバナですが、今では大切に育てられ観賞用となっている「ヒガンバナ」も各地にあります。埼玉県内では、巾着田や権現堂のヒガンバナが有名ですし、さいたま市でも見沼自然公園などで楽しむことができます。

みぬま見聞館の自然庭園でもわずかではありますが、毎年のようにヒガンバナが鮮やかな赤い花を咲かせ、その度に目を奪われます。

そんなヒガンバナや、まだまだ賑やかに鳴き頑張っているセミなど、「秋」の気配漂う自然庭園に足を運んでみてください。



自然庭園のヒガンバナ
毎年、片隅でひっそりと咲いています



自然庭園のヒガンバナの花
今年も鮮やかな赤い花を咲かせること
でしょう



群生するヒガンバナ
鑑賞用のヒガンバナはこんなイメージでは
ないでしょうか



ヒガンバナの花
よく見ると開いた花が6つあることがわ
かります



ハグロトンボ
自然庭園の日陰などで長い期間、見られます



アブラゼミ
自然庭園のでは一番目立つセミかもしれ
ません



ニイニイゼミ
鳴き声は聞こえてもその姿を見つけるのは
難しいですよ



ツクツクボウシ
鳴き声が印象的です